

## ウサギの耳

昔、ウサギは食用であった。しかしながら時代は仏教隆盛の頃である、四つ足を食してよいはずがない。そこで目につけたのが長い耳だ。耳を翼とすればウサギは鳥の仲間だ。戒律厳しい中でも二つ足の鳥は食って問題ない。だから鳥類であるウサギは食べてもバチがあたらない。詭弁的三段論法によってウサギは食用になったのである。

そこでくれぐれも注意しなくてはならないのは数の呼び方だ。「頭」「匹」などと数えたら、なんだ貴様はやっぱりウサギを獣と思っているのではないかと言われそう。それで「羽」と数えた。徹底している。

現代は宗教上の障害は何もない。ウサギの肉は粘りがあるのでバインダーとして豚の肉に加えてソーセージを作る。でもやはり数え方は「羽」である。いやバツタを「頭」と数えることが少なくなったようにウサギも今は「匹」だろうか。

ウサギはオーストラリアでは芝刈り名人である。芝を刈る時まず牛を入れる。牛は広い場所では有効である、しかし木の下あたりは食い残す。そこで次にウサギを入れる。ウサギは低い植栽の下の草を食う。ただし、放っておくと完璧に芝自体がなくなり、低木は緑色の部分がなくなり、庭に穴さえ空けるので注意を要する。

ウサギの漢字はいくつかある。本来は「兔」であるが、「菟、兎、菟」などと書く。各文字とも上部はウサギの耳の象形である。

ウサギにも敏捷なのと鈍重なのがいるだろう。いやウサギは本来敏捷なのであって鈍重なのはカメと言わなくてはならないかもしれない。でも漢人は足の速いウサギを意識している。

あまり見慣れない漢字であるが、「兔<sub>疾</sub>」は「足の速いウサギ」である。

「兔<sub>疾</sub>」の上部「兔<sub>疾</sub>」は篆書では「兔<sub>疾</sub>」である。意味するところは「ウサギに似た獣」

とのこと。下部「兔」は「兔」である。こちらはウサギである。「2羽の敏捷なウサギが

同時に逃げて人の目をくらます」が「兔<sub>疾</sub>」のもつ意味らしい。

よく見ると足の速い「兔<sub>疾</sub>」の方が足が一本多い。赤塚不二夫氏描くところの駆け足のシーンである。これはきっと速いだろう。

足の速いのは捕まえにくい。畑の作物を食って荒し、捕まえようとしても捕まえられない。放っておくとさらに畑を荒らす。だから「ずるいウサギ」。さらに転じて「<sup>むさぼ</sup>貪る、欲が深い」となる。

ウサギを悪者にしたのは価値観の問題で農業従事者の見るところである。狩猟者は足が速い方が面白いに決まっている。

人に追い詰められ逃げた2匹のウサギは可哀想に「ずるい」とされた。それだけで人は鬱憤は晴らせたろうに、恨みは骨髓に達していたのかもしれない。これを偏旁にした文字がある。偏旁になった場合さらに「みだれる、するどい」という意味も持った。

**讒**=そしる、**囋**=けわしい、**攪**=つきさす、**儻**=ととのわない、**纒**=赤黒い

色の絹、**劊**=断ち切る、**櫨**=檀、**饑**=むさぼる、**鑿**=するどい・錐

以上を見てもあまりポジティブな漢字ではない。

「そしる」を試しに見てみると、いかにも人間社会だ。ずいぶんと漢字を用意してある。

非（ヒ）、人の悪口を言う。そむきあう。

誹（ヒ）、悪口を言う。

譖（シン）、陰口を言う。

刺（シ）、諷刺。

毀（キ）、悪口を言う。

吡（ヒ）、非難する。

咎（シ）、口で人を傷つける。

訾（シ）、言葉で人を傷つける。

訕（セン）、目上の人の悪口を言う。

詆（テイ）、人を低めて言う。

謗（ボウ）、悪意に満ちた言葉で他人の言動で妨げる。

譏（キ）、人の欠点を細かく調べて言う。

姍（サン）、目上の人の悪口を言う。

讒（ザン）、ある人物の正しい評価を混乱させる。

誹謗、讒言は現代でも私たちの口に上る言葉であるが、「讒」は上の14字の中でもかなり具体的できつい言葉であるようだ。人類はウサギに対してはよほど辛い思いをしたようだ。いま

猿害で悩んでいる日光市あたりで「ずるい」を漢字にすると「**讒**」だろうか。

ただ十分注意しなくてはならないのは「そしり」も絶対的なものではないことで、そしる側そしられる側との力関係がある。「そしり」を事実として宣伝し競争相手を死に追いやった事件は過去に山ほどある。藤原氏による菅原道真の流罪に近い配転・長屋親王の自殺、天皇家による物部・蘇我氏の滅亡などはどうやら「誹謗中傷」が因らしい。

現代だって事件の裏にどれほどの陰謀があるやら、みんなウサギならぬ驢馬の耳をそばだてている。だからなんだかんだ言われながらテレビのワイドショウは絶対に消滅しない。

この著作権は岡和男に帰属します。  
©Kazuo Oka 2000